

5 ジェネレイショナル・サイクル

—先行世代との円環・後続世代との円環—

西平 直

「ジェネレイショナル・サイクル」とは、簡単に言えば、「いのちのバトンリレー」のことです。親からもらった生命を、次の代に手渡してゆく。そうした「いのちのバトンリレー」の中に、〈子どもを育てる〉ということがあり、〈親を介護する〉ということがあります。そしていずれは自分自身が〈介護される側〉に回ります。そうした「サイクル」を、E・H・エリクソンという思想家は、「ジェネレイショナル・サイクル generational cycle」と呼びました。直訳すれば「世代的な円環」。世代から世代へと継続してゆく関係を大きなサイクルとして理解しようという試みです。

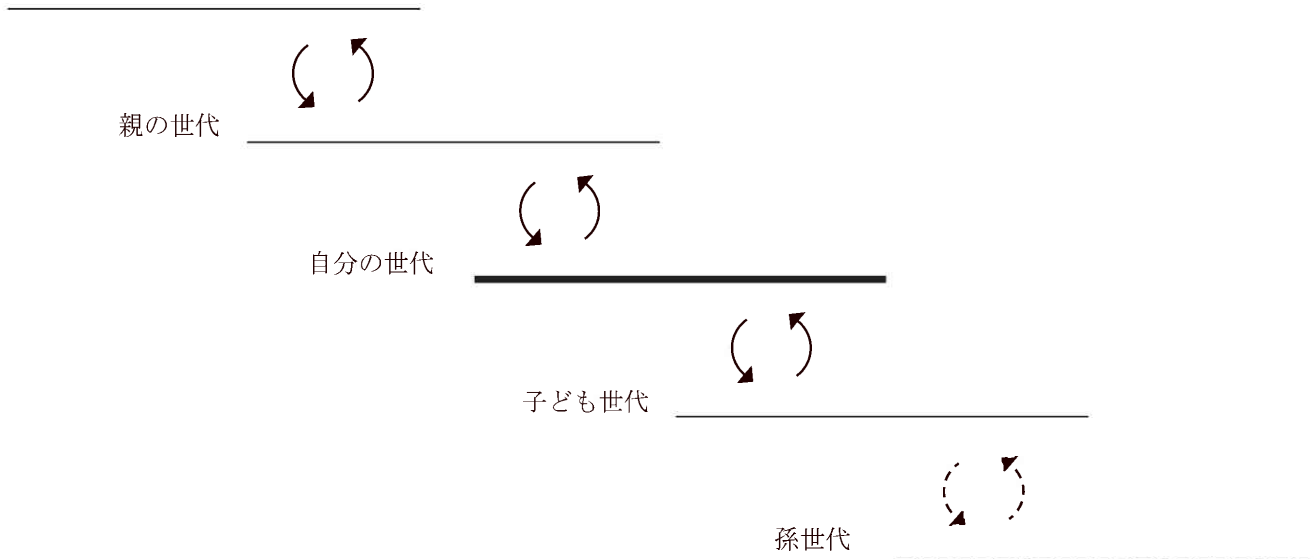
エリクソンという人は「アイデンティティ」や「ライフサイクル」という言葉で知られる（精神分析から出発した）思想家ですが、実はそうした「アイデンティティ」や「ライフサイクル」がより大きな「ジェネレイショナル・サイクル」の中の出来事であることを強調していたのです。

1 ジェネレイショナル・サイクルとは何か

エリクソンは『老年期』という本の中でこんな話を紹介しています（Erikson,1986）。自分たちの子育ての経験を回想する老夫婦。老夫婦はまず、自分の子どもたちについて語ります。〈今は親になっている子どもたち〉の子育てが成功しているかどうか。そこから、自分たちの子育てが成功したのかどうか語り合います。そして、そこから思い返す仕方で、今度は、自分が子どもだった頃のことを語り出します。子どもの頃どんなふうに育てられていたか。父親が怒るとどんなに怖かったか。

ということは、ここには四つの世代が登場していることになります。〈孫の世代〉、〈子どもの世代〉、〈自分の世代〉、〈その親の世代〉。ややこしいですが、子どもの世代が孫の世代を育てるのを見ながら、自分たちが子どもたちをどう育ててきたかを思い起こし、さらに今度は、自分たちが昔々子どもであった時、その両親からどのように育てられたかを思い起こす。互いにかみ合う四つの世代の歯車。エリクソンは、そうした〈育て―育てられる〉関係の織物の中で、人の人生を見ようとしていたのです（図1）。

図1、四世代の重なり



ところで、エリクソンの話は、親子関係を中心としていますが、しかしそこに限定されるわけではありません。より広く、世代と世代の関係について見ようとしているのです。例えば、ひとつの芸風を継承する師匠と弟子の関係。あるいは、伝統を守ろうとする大人の世代と時代に即した変革を求める若者との関係。それらをすべて、世代と世代の関係という意味において「ジェネレイショナル・サイクル」の問題として捉えているのです。

そこでエリクソンは「世代から世代へ (from generation to generation)」という言葉もしばしば使います。しかしそこには二つの対立する意味が含まれていることになります。

ひとつは、伝統の存続・継承。前世代から受け継いできたものを確実に次の世代へ手渡してゆくことです。例えば、前の世代が確立した芸能（わざ）を正確に受け継ぎ、絶やさぬように、次の世代に伝えてゆくことです。

他方で、この「世代から世代へ」という言葉には、生成・変革の可能性も含まれています。同じことの繰り返しではなくて、時代が変わる中で伝統も変化する（リニューアルする）。前世代とは異なる仕方で新しい世代が創造する。つまり、変化することによって初めて生命体が保たれるという、社会の新陳代謝の意味です。

実は、こうした理解に対して、「新たな創造」などということは極めて稀なことであって凡人には縁遠い、という批判があります。そして実際、私たちの場合は、保存・継承が土台になっていて、その先にごく例外的に「新たな創造」の可能性が残されているという方が、実感に近いように思われます。それに対して、エリクソンの場合は、新天地アメリカ

に移住し、しかも大きな社会変革の時代を生きたこともあって（例えば市民権運動、学生運動）、どちらかと云えば、前世代と異なる仕方でも新たに創造する側面を強調する傾向が強いのかかもしれません。この点は、いずれまた、問題になります。

2 ジェネラティヴィティ —ジェネレイショナル・サイクルの中のジェネラティヴィティ

さて、似た言葉でややこしいのですが、今度は「ジェネラティヴィティ generativity」という言葉を見ることにします。エリクソンはこの言葉によって成人期に特徴的な課題を示そうとしました。

この言葉は、名詞「generation（世代）」や 形容詞「generative（生殖力のある、生成的な）」からエリクソンが作りだした造語です。訳語については、例えば、「生殖性」「世代継承性」「生成継承性」「次世代育成力」など、様々な工夫がありましたが、いずれも一長一短。結局、今日では「ジェネラティヴィティ」とカタカナのまま表記されることになりました（なお、小さなことですが、カタカナ表記として「ジェネレイティヴィティ」も可能ですが、generative が「ジェナラティヴ」と軟らかく発音されることもあり、日本語の音としては「ジェネラティヴィティ」の方が馴染みやすいと考えています）。

ところで、先に見た「ジェネレイショナル・サイクル」の問題は、実は従来、この「ジェネラティヴィティ」の話に回収（還元）されて語られてしまうことが多かったのです。つまり成人期の課題としてのみ、理解されてきたというわけです。

しかし「いのちのバトンリレー」は成人期だけの問題ではありません。むしろ視野の広がりとしては、ジェネレイショナル・サイクルの方が格段に大きいのです。いわば「ジェネレイショナル・サイクル」という大きな織物の中に、個人のライフサイクルが埋め込まれており、そのライフサイクルの特定の時期（第七ステージ）にジェネラティヴィティの危機が現れるという関係なのです。そしてそう理解してみれば、確かに、成人期（第七ステージ）が、この「ジェネレイショナル・サイクル」の問題に対して最も負担を大きく感じる時期であるというわけです。

エリクソンは「ジェネラティヴィティの危機」ということを言いました。ではいかなる意味で危機なのかといえば、二つの場面、一つは「育てる」場面、もう一つは「手放す」場面なのです。今から見てゆくように、前者が「愛情を注ぐこと attachment」、後者が、愛情を込めて育てたものへの「執着を手放すこと detachment」。その両者の複雑な絡み合った関係が「ジェネラティヴィティの危機」なのです。少し立ち入ってみることにします。

（１）「育てる」場面で体験されるジェネラティヴィティの危機

「次世代を育てる」といいます。しかしなぜ人は「育てる」ようになるのでしょうか。

時期が来ると本能によって育てることが可能になるのでしょうか。仮にそうであったとしても、例えば、幼児期のつらい体験が、その「本能」を狂わせることはないのでしょうか。

エリクソンはこんな風に問題を設定します。子どもの頃、親から愛される経験を持つことが出来なかった人は、ジェネラティヴィティの獲得が困難であるのか。

そしてこの問いの延長上に、私たちは「虐待の連鎖」という（しばしば必要以上に誇張して取り上げられてしまう）悲しい問題を連想します。子どもの頃に親から虐待された経験を持つ人たちが、自分の子どもに虐待を繰り返してしまうというケースをどう理解したらよいか。

その体験者たちは語ります。・・愛情を注ぐことができない。自分は愛されてこなかったのに親として子どもに愛情を注がなければならない。親として愛情を注がなければならないという状況が、それまで忘れていた〈自分は愛されていなかった〉という心の傷を呼び起こしてしまう。そして追い詰められ気が付いたら同じことを繰り返している。あるいは、気が付かないうちに自分自身を〈同じことを繰り返す状況〉に追い込んでしまう・・。

それは「不幸の連鎖」のような世代間の行動伝播。「復讐の連鎖」とでも呼びたくなるような悲しい繰り返しです。では、私たちはそうした連鎖を自分の代で断ち切ることができるのでしょうか。〈否定的な過去〉を肯定的に練り直し〈肯定的な遺産〉を次の世代に手渡してゆく可能性が、私たちには残されているのでしょうか。

エリクソンは、そのために必要な「力・強さ・資質・**basic strength**」を「ジェネラティヴィティ」と呼んだわけです。

では、いかにして個人の内にジェネラティヴィティは育つのかといえば、話は簡単ではありません。実はエリクソンの思想のすべてがこの一点に集約されてゆくと言っても過言ではないほど、話は複雑に絡み合っているのですが、ここでは二点のみ。

第一は、「チャート（エピジェネティック・チャート）」における空欄の意味です。エリクソンは、人生の経験が、順に堆積し積み重なってゆくと考えています。消えてしまわない、地層のように堆積してゆく。ということは、幼児期の体験が極めて重要であることとなります。しかしエリクソンは「幼児期決定論」には同意しません。幼児期の体験によってその後の人生が決まってしまうとは考えないということです。むしろ「練り直す」可能性を追究し、そのために「空欄」を残すのです。もちろん「やり直す」ことはできないのですが、しかし「練り直す・意味づけ直す」ことはできと考えるのです。精神分析家として、エリクソンは、人が自らの人生を「語り直す」ことによって、過去の体験を新たに意味づけ直す可能性に希望を見ていました。つまり空欄は、人生を「語り直す」ことによって〈否定的な過去を肯定的に練り直す〉可能性を示していたことになるわけです。

第二に、ところが人は、一人ではジェネラティヴィティを獲得することができない。エリクソンはその点を強調しました。必ず誰か「相手」を必要とする。それは友人でも夫婦でも親子でもよい、というより、正確には、人生段階ごとに必要な相手（重要な意味を持

つ他者)が異なるのです。いずれにせよ、そうした他者によって支えられることなしには(あるいは少なくともそうした相手との「やりとり」なしには)、ジェネラティヴィティを獲得することができないということをエリクソンは強調したのです。

では、相手次第(他人まかせ)ということなのでしょうか。そうではありません。むしろ〈相手と良い関係を作るセンス〉が求められています。例えば、つながりを作る、励まし合う、場合によっては、〈相手をして私のことを世話せずにはいられなくなるような気持ちにさせてしまうある種の魅力(甘え上手)〉まで含めて、他者とやり取りする中でしか、ジェネラティヴィティは育たないというわけです。

確かに、ジェネレイショナル・サイクルという大きな織物の中で、〈否定的な過去を次世代にも伝播してしまう〉不幸の連鎖は、親子関係以外の場面でも起こりえます。しかし人間の内には、その連鎖を自らの代で断ち切る可能性も残されています。そうした〈否定的な過去を肯定的に練り直す〉可能性をエリクソンはジェネラティヴィティと呼んだわけです。

(2)「手放す」場面で体験されるジェネラティヴィティの危機

ジェネラティヴィティの危機のもう一つの場面は「子離れ」です。自分が生み育ててきたものを自分の手から解き放つこと。

どうやらエリクソンは、こちらの方をより困難な課題と考えていたようです。次世代に愛情を注ぐことも十分困難であるのに、そうやって自ら生み育てた次世代を手放してゆくことの困難は、より一層、深刻な危機を人にもたらす、というわけです。

エリクソンは「手放す能力 the ability to lose oneself」という言葉を使いました(Erikson,1965)。自分が生み育ててきたものを手放す能力。あるいは、自分が創り出したものを次世代の手にゆだねること。その成果を自分の手元に留めてしまったら、ジェネラティヴィティは完了しません。自分の創り出した成果に執着しているかぎり、ジェネラティヴィティの危機が継続してしまう。子離れができて初めて子育ての仕事が完了するというわけです。

では、すべての判断を次世代に任せればそれでよいのでしょうか。そんなことはありません。変えてはならない原則があります。たとえ新世代が刷新を望むとしても、守らなければならない価値があります。

そこで対立が生じ、そしてまさにその対立の中で、あらためて、親世代の生き方が問い直されることになります。本当に守り通すことが必要なのか。自分たちが前の代(先行世代)から受け継いできた価値は本当にすべて守り通すべきなのか。その危機(分岐点)が、ジェネラティヴィティの危機なのです。

そして、面白いことに、実はその危機が、次世代(若者世代)にとっては、アイデンティティの危機として体験されます。前世代(親世代)との対立を通して自分の立場を掴み

取ってゆく。まさに自己確立のための闘いです。ということは、〈若者世代にとってのアイデンティティの危機〉が〈大人世代にとってのジェネラティヴィティの危機〉と噛み合い、あるいは、〈若者世代がアイデンティティの危機を乗り越えようと努力する〉のと同じだけ、〈大人世代はジェネラティヴィティの危機を乗り越えるための努力〉を必要とするというわけです。

考えてみれば、成人期は、自分の創り出した成果に愛着を持つ（持たざるを得ない）時期です。しかし愛着は「執着」になります。むしろ「執着」と「愛着」は表裏一体なのです（英語の *attachment* はその両方の意味で使われます）。必要であると同時に自分を縛り苦しめます。ジェネラティヴィティに必要な「手放す能力 *the ability to lose oneself*」とは、まさにそうした「執着（愛着）」を手放す能力 *dettachment* であったわけです。

しかしここでもまた、いかにしてその「能力」を獲得することができるのでしょうか。逆説的ですが、それは、愛着の対象から「引き出される」ことによってなのです。手塩にかけた子どもが独立しようとする、まさにその葛藤の中で、手放す能力が引き出されてゆくというわけです（独立してゆく子どもとの葛藤が「リリーサー（解発因）」になるということです）。

愛着など持たなければ葛藤に苦しむこともありません。その代わり、そうした葛藤なしには、執着から離れる「強さ」も育ちません。そして執着から離れる「強さ」が育たないかぎり、ジェネラティヴィティの危機が続いてしまいます（愛着の持てない不安全感と愛着から逃げ続ける不安全感を背負い続けることになります）。

大人は、自分の創り出した成果に執着せざるを得ない、にもかかわらず（あるいは、だからこそ）そこから離れることが課題となるということなのです。

こうして個人のライフサイクルの中で、成人期という時期は、次世代との関係の中で様々な葛藤を体験する時期ということになります。しかしエリクソンが語ったのは、「次世代を育てる」という側面に過ぎないのです。実は、ジェネレイショナル・サイクルとして考えた時には、もう半面、「前世代との関係」が残っていることに気が付きます。「後続世代との関係」に対して「先行世代との関係」というわけです。

3 エリクソンが語らなかったこと — 「看取る—看取られる」の連鎖

エリクソンは「ジェネレイショナル・サイクル」を〈育てる—育てられる〉の連鎖として考えていました。それでは「育てる」務めを終えた人は、このサイクルから離れてしまうのでしょうか。そんなことを考えていた時、発達心理学者・鯨岡峻氏の言葉に出会いました。人の発達を定義するために工夫された見事な言葉。

「育てられる者から育てる者へ、看取る者から看取られる者へ」[鯨岡 2004]。

人は「育てられる者」として人生を開始し、成長して「育てる者」になる（図2）。さらに、先行する世代を「看取る者（介護する者）」になり、いずれ今度は「看取られる者（介護される者）」になってゆくというわけです（図3）。

図2、育てられるから育てるへ

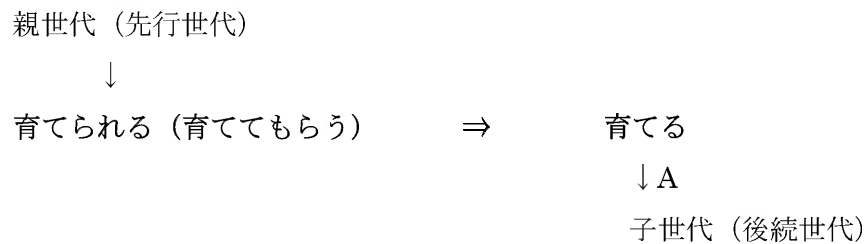
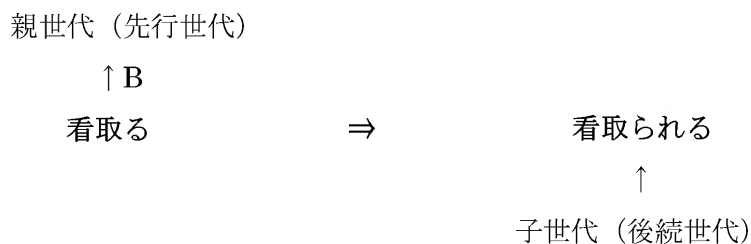


図3、看取るから看取られるへ

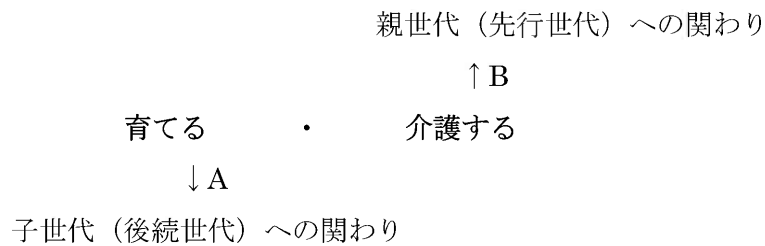


まず、興味深いのは「看取る－看取られる」という関係です。しかも「看取る側」であった者が、いずれ「看取られる側へ」と立場が変容してゆきます。そしてそのことが「育てられる者から育てる者へ」という発達プロセスの延長上に描き出されています。

そしてそこから見直してみる時、エリクソンには、〈先行する世代（親世代）への関わり〉の視点は弱かったこととなります。子育ての困難については語ってくれたが、親を看取る困難については、あまり語ってくれなかったというわけです。

例えば、親の介護。育ててくれた親を、今度は、自分が介護する。〈育てられた子〉が今度は〈介護する側〉になる。そう考えてみれば、「老人介護」の問題は、〈先行世代との関わり〉のひとつの場面ということになります。子どもの養育が〈後続世代への関わり（A）〉の典型であるとするれば、老人の介護は〈先行世代への関わり（B）〉の典型ということになります（図4）。

図4、現役世代が担う二つのケア（育てる・介護する）



では、この二つの関わり（A と B）は、どこまでパラレルに考えることができるのでしょうか。たとえば、〈親を看取ったようにしか看取ってもらうことはできない〉という話をどう考えたらよいのでしょうか。おそらくこうした問題は、子育て以上に一般化することが困難であるように思われますが、今は具体的な事例に即して検討することはできませんから、その代わり、ジェネレイショナル・サイクルの図表によって初めて浮き彫りになってくる問題を少し整理しておくことにします。

一、「介護する－介護される」という関係も、ジェネラティヴィティの問題として考えてよいのだと思います。確かにエリクソンは「ジェネラティヴィティ」を〈後続世代への関わり（A）〉について語ったのですが、しかし現役世代の課題として見た時、〈後続世代への関わり（A）〉と〈先行世代への関わり（B）〉は、ともに成人期において果たすべき課題として共通した「力・能力・資質」を必要とすると思われます。

二、「育てる－育てられる」が実は一方的ではなく、相互关系的（育てることによって育てられる）とすれば、「介護する－介護される」も何らかの相互的である可能性が出てきます。

「介護する」ことによって「介護されている」。あるいは、人は「介護する」ことによって成長する（発達する・新しいステージに移る）。この問題は、今はこれ以上考えることができませんが、ケア論の中で面白い論点になるように思われます。

三、今度は、「介護される側（先行世代）」から見た時、その関係は〈後続世代への関わり〉ということになります。若かった時には、〈後続世代との関わり〉といえば「子育て」を意味しましたが、老年になると「介護してもらう」という仕方で〈後続世代との関わり〉を持つことになります。ではそれもジェネラティヴィティの問題なのでしょうか。「介護される側」にも「関係を作る（やりとりをする）力・能力・資質」が求められるとしたら、それもジェネラティヴィティの一つとして考えるべきなのでしょうか。

四、ところで、こうした「介護・看取り・弔い」の問題は、しばしば家族の問題として理解されてきました。例えば、親に対する「恩」や「孝行」の問題。あるいは「家制度イデオロギー」と結びつく仕方で、個人を家系の中に閉じ込める仕方で理解されてきました。それに対して、エリクソンの語るジェネレイショナル・サイクルは、この問題を、家（家

制度）と直結させずに扱う可能性を示しています。ジェネレイショナル・サイクルにおける〈先行世代への関わり〉は血縁関係に限定されません。先輩世代との関わりも、師匠（先生）との関わりも、伝統規範との関わりも、すべて内に含みながら、〈先行する世代との関わり〉を視野に納めています。

五、その上で、生命進化における〈先行世代への関わり〉を考えてみます。他の生物種は、後続世代の養育が終わると、その多くは寿命を終えます（老年期がない、あるいはごく短いということです）。人類は例外的に、後続世代の養育を終えた後に長い「老年期」を過ごすようになりました。まして平均寿命が延び、〈先行世代のために用いる労力〉が〈後続世代のために用いる労力〉を脅かす現状は、生命進化の視点から見れば（おそらく）健全とは言い難い状況ということになります。しかし他方で、長寿は喜ばしく、人生の晩年が喜びに満ちた社会を工夫したいと思います。では共同体の新陳代謝（the cyclical renewal）という視点から見た時、現代の状況はどう理解されるのでしょうか。〈後続世代のために用いる労力〉と〈先行世代のために用いる労力〉の配分をどのように調整するか。あるいは、その様に問いを立てるということそれ自体が、既に差別なのか。最後に残された差別と云われる高齢者に対する差別の温床になってしまうのか。大変困難な課題を我が身に引き受けることになります。

4 世代間倫理とジェネレイショナル・サイクル

ところで、世代と世代の関係を問題にするからには、「世代間倫理」についても少しばかり見ておく必要があります。世代間倫理 intergenerational ethics は、将来世代の権利を守ることを主要な課題としています。とりわけ、〈現在世代〉と利害が対立する問題について〈将来世代〉の権利を守る課題。正確には、両者のバランスを調整することが中心課題となります。典型的には核廃棄物の問題があり、現在世代の利便性のために、その後始末（廃棄物の処理）を将来世代に押し付けてしまうことに対して、将来世代の立場から、その権利を守ろうとする議論（そして、それに対する批判、あるいはそうした議論の成立根拠についての議論）をしています。

さて、重要なのは、世代間倫理が〈将来世代（後続世代）〉との関係に焦点を当てているという点、少なくとも、〈先行世代（過去世代）〉との関係については言及が少ないという点です。「先行世代から受け継ぎ後続世代へと伝えてゆく」連鎖（サイクル）の視点が弱いように見えるのです。

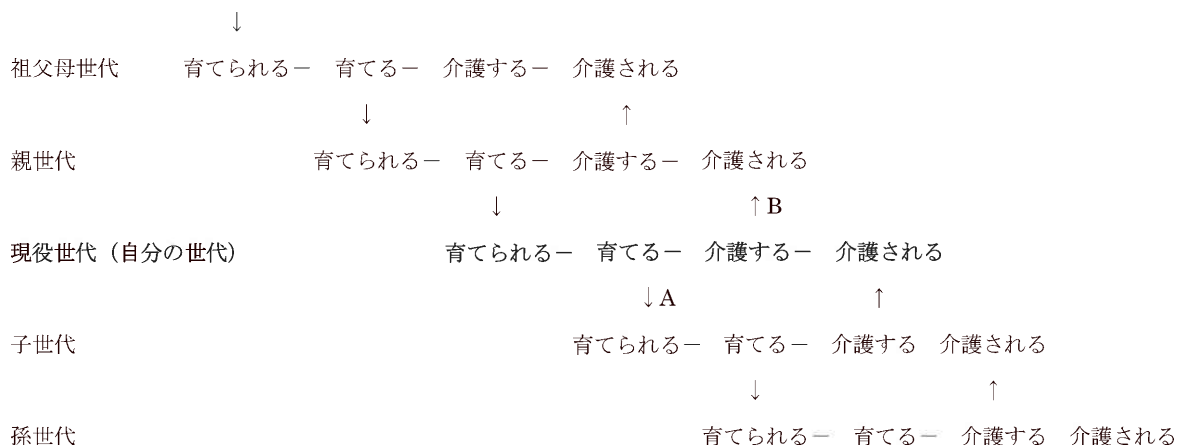
ところが、よく見ると、世代間倫理の中でも、議論によって「世代間」の意味する位相が微妙に異なっているようです。

ひとつは、「現存する世代相互の葛藤」。例えば、年金制度のように、大人世代のツケを

子世代に背負わせてしまう問題は、現存する世代相互の葛藤ということになります。

ところが、「過去世代から現在世代へ、そして将来世代へ、という連続性」を視野に入れた議論もあります。例えば、先祖から受け継いだ土地を子孫にも保証してゆくという議論です。そしてその議論の中で、「最大多数の最大幸福」という功利主義原則が読み換えられ、「最大期間にわたる最大多数の最大幸福」ということが主張されています。つまり、現在の世代に視野を限った「最大多数」ではない、最も長い期間に渡って最も多くの人が最大幸福を得る可能性を追究するという課題が提示されているわけです。

とりわけ、ジェネレイショナル・サイクルの地平は、将来世代（後続世代）を視野に入れるのと同じだけ、既に死者となった先行世代を視野に入れます。この場合、「死者となった先行世代の権利を守る」という表現が適切であるのか（「死者の権利」が可能であるのか）微妙ですが、少なくとも、ジェネレイショナル・サイクルの地平は、「死者となった先行世代へのケア」を「後続する将来世代へのケア」とワンセットにする視点を提示していることになります。それは例えば、自然に対する敬意と死者に対する敬意が、共に現在世代の人間を中心とした視点を超えるという問題とも関連しています。



こうして、世代間倫理の議論と重ね合わせてみる時、ジェネレイショナル・サイクルの地平は、「死者となった先行世代へのケア」と「後続する将来世代へのケア」を同時に（むしろその相違は明確にしつつ）視野におくことを私たちに示していたことになります（図5）。

5 子育て・教育・介護・供養 —ジェネレイショナル・サイクルの大きな織物の中で

最後に「ジェネレイショナル・サイクル」という大きな織物について、あらためて論点を整理し直して、まとめに代えることにします。

一、異世代関係は、一方向的な働きかけに見えますが、実際は、常に相互的です。子どもが育てられることによって成長するのと同じだけ、大人も子どもを育てることによって成長するというわけです。

二、「看取る—看取られる」という関係も同じであるのかもしれませんが。看取る者は看取ることによって成長し（プロセスを先に進め）、看取られる者は看取られることによって成長する（プロセスを先に進める）。

三、視点を共同体（家族、村落、・・・）に移してみると、ジェネレイショナル・サイクルとは、共同体の新陳代謝のことでした。新しいメンバーが加わることによって共同体がリニューアルし、任務を終えたメンバーを看取る（感謝し敬意を表する）ことによって共同体がリニューアルする。共同体は後継者を必要とするというわけです。そしてそのように見た時、このサイクルが私的領域を越えた営みであることは明らかです。確かに家族を単位とする血縁関係が基本的モデルになりますが、その先に、例えば、文化遺産を前の世代から受け継ぎ次の世代に伝達してゆく文化共同体のジェネレイショナル・サイクルがあり、あるいは、民族や国家や宗教をひとつの単位としたジェネレイショナル・サイクルがあり、さらには、人類全体をひとつの共同体と見た時のジェネレイショナル・サイクル（種の持続）があり、その先に、地球生命体（生きとし生けるものすべて）のジェネレイショナル・サイクル（いのちのつながり・web of life）があることになります。

四、この地平において、「将来世代に対するケア（連帯）」と「過去世代に対するケア（連帯）」とを同じ一つのサイクルの中に位置づけてみる時、そのバランスをいかに調整し得るかという困難な課題が切実になります。子育て支援（子育て・教育）と、介護支援（介護・供養）を両立させる困難。そしてその間に挟まれる現役世代の葛藤。そうしたケアに追われる現役世代が自らの人生のために時間を遣うことができない困難。この点が課題であることは、最後にもう一度、確認します）。

五、ジェネレイショナル・サイクルを、すべてが同時連動している姿として理解するこ

ともできます。いわば、構造的な相互連関として、系統発生や個体発生という時間軸ではなく、構造的に（共時的に）すべての世代が連動し合っている姿。例えば、子世代との関係の歯車は、親世代との関係の歯車と連動し、親世代との関連は、その前の祖父母世代と親世代との関係と連動しています。過ぎ去った出来事でもなければ、遠い将来の出来事でもありません。ジェネレイショナル・サイクルという大きな織物の中では、すべての関わり合いが同時的に連動し、今現在において噛み合っていることになるわけです。

おわりに

さて、以上のように理解した上で、あらためて、現役世代のことを思い起こしてみます。私たち現役世代は、時代の変化の中で、ジェネレイショナル・サイクルから離れ、個人を大切にす道歩んできました。私たち現代人（とりわけ「先進国」の住人）は、その制約から可能なかぎり離れ、個人を優先して生きる道を歩み始めてきました。例えば、家制度から個人を解放し、あるいは、女性の働く権利を保障するという仕方で、長い闘いの中で勝ち取られてきた権利、個人が自分の人生を「自らのために」用いる権利。先祖のために生きるのではなく、子孫のために生きるのでもない、自分の人生を存分に開花させるために生きる権利。

そう考えてみれば、私たち現役世代にとって最も切実な問いは、〈個人の権利〉と〈先行世代をケアし後続世代をケアする務め〉との葛藤、そのバランスをいかに取ることができるか、という点であったこととなります。ジェネレイショナル・サイクルの円環は、そうした問題の所在を示す仕方で、私たちを新たな問いに連れ出してゆくことになるわけです。

■引用参考文献

- Erikson, E. H., 1958 *Young Man Luther*, W.W. Norton&Co.. =西平直訳 2002/2003 『青年ルター（1）（2）』 みすず書房
- , 1959 *Identity and the Life Cycle, "Psychological Issues"* Vol.1, No.1. International Universities Press. =西平直・中島由恵訳 2011 『アイデンティティとライフサイクル』 誠信書房
- , 1980 *On the Generational Cycle, "Int. J. of Psychoanalysis"* Vol.61.
- , 1981 *On Generativity and Identity, "Harvard Educational Review"* Vol.51, No.2.
- Erikson, E. H, Erikson, J. M., Kivnick, H. Q., 1986 *Vital Involvement in Old Age*, Norton. =朝長正徳・朝長梨枝子訳 1990 『老年期』 みすず書房
- D.P.McAdams, de St.Aubin, 1998 *Generativity and Adult Development*, American Psychological Association.

Bloland, Sue Erikson, 2005 *In the shadow of Fame: A Memoir by the daughter of Erik H. Erikson*, Penguin Books.

Axel Gosseries & Lukas H. Meyer (eds.), 2009 *Intergenerational Justice*, Oxford University Press.

鯨岡 峻 2004 「次世代育成の諸問題」『教育学研究』第71巻3号

西平 直 1993 『エリクソンの人間学』東京大学出版会

—— 2005 「アイデンティティとスピリチュアリティ」『現代と親鸞』第9号、親鸞仏教センター、pp.53-110

鈴木興太郎・宇佐美誠・金泰昌編 2006 『公共哲学 20 世代間関係から考える公共性』東京大学出版会